

三重県津市立小中一貫教育について

2011SE160 三村優理子

指導教員：腰塚武志

1 はじめに

日本では、戦後約70年にわたり、6-3-3-4制の学制が採用されてきた。しかし、少子高齢化など子供を取り巻く環境は近年大きく変化している。学制導入時と比較して発達の早期化が見られるほか、中1ギャップ（小学校から中学校に進学したときに、学習内容や生活リズムの変化になじむ事ができず、いじめが増加したり、不登校になったりする現象）など課題が指摘されている。津市では、平成26年度に5つの推進中学校区で小中一貫教育の実践を開始した。段階的に取り組んでいき、平成29年度には全小中学校区において小中一貫教育を実施する計画である。

そこで本研究では、三重県津市の小中学校を対象とし、小中学校9年間で4-3-2制で区切った場合、教室数や距離等を踏まえ、それぞれ施設との組み合わせを考え、議論したい。

2 小中一貫教育について

平成26年9月現在、小学校と中学校が連携し、9年間を通じた教育課程をつくる「小中一貫教育」を導入している市町村は211自治体ある。これは、全体の12%に当たり、まだまだ普及していない事が分かる。小中一貫教育を実施している小中学校は計1130組あり、うち約7割にあたる810組は6-3制であり、約3割にあたる320組は4-3-2制や5-2-2制で実施している。また、211自治体の約9割が取り組みに成果があったとしている[3]。具体的には、中1ギャップの緩和や学力の向上などが挙げられる。一方で、教職員の負担感や多忙感の解消、児童生徒や教職員が交流する際の移動時間の確保など交流の困難さが大きな課題となる。

一般的に、小中一貫教育の施設形態は3種類ある。小学校と中学校が同じ校舎に設置されている施設一体型、隣接して設置されている施設併設型、離れた場所に設置されている施設分離型がある。

3 津市の現状

3.1 背景

三重県津市は、総人口284,859人、市の総面積は710.81km²である。小学校の児童生徒数は14545人、中学校の児童生徒数は6942人である[1]。図1から分かるように、津市の小・中学校の児童生徒数は市街地に多く、全くない地域も多く見られる[2]。また、津市には市立小学校が本校51校、市立中学校が本校20校存在する。津市立小中学校の分校は、それぞれ2校ずつ存在するが、一貫教育を取

り入れていないため、ここでは除いておく。

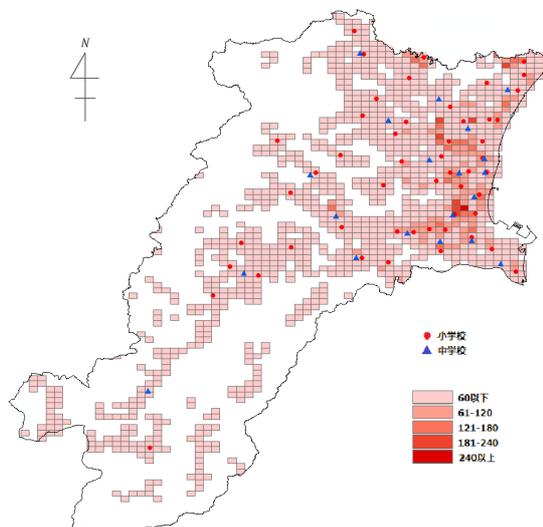


図1: 500mメッシュデータでの小・中学生人口分布と小中学校の配置

3.2 津市立小中一貫校区

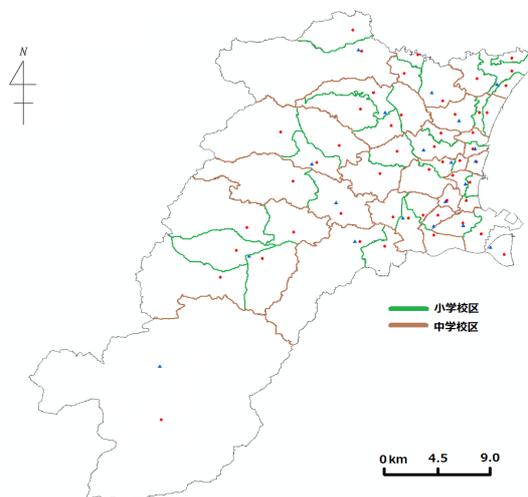


図2: 津市立小中一貫学校区

図2は、小中一貫教育が行われる中学校区、小学校区をそれぞれ示したものである。ほとんどの中学校区では、いくつかの小学校区を合わせたものとして構成されている。しかし、市街地に存在する西郊中学校区、橋北中学校区、西橋内中学校区、橋南中学校区の4中学校区は、それぞれ一部の小学校のみ、小学校区を町・大字によって区切られ

た中学校区になっている。よって、小中一貫教育を行うには、小学校区に中学校区を合わせるか、中学校区に小学校区に合わせるか考えなくてはならない。その時、学校規模や地域での生徒数、少子化など考慮して慎重に検討する必要がある。

4 4-3-2 制の提案

4.1 対象校

中1ギャップの緩和が小中一貫教育推進の主なねらいの一つである。そのため、6-3 制の学制より、4-3-2 制の学制がより効果的なものであると主張したい。ここでは、津市の都市部の中学校区と山間部の中学校区をそれぞれ調査し、2013 年度データ(教室数、生徒数など)をもとに、この4-3-2 制が実現できるかどうかを考察する。まず、4-3-2 制をそれぞれ前期、中期、後期とした。小中学校における学級規模(クラスサイズ)の上限は、小学校1年生と中学校1年生はそれぞれ35人、小学校2~6年生と中学校2~3年生はそれぞれ40人とした。これらの学級編制は、三重県が独自で実施しているものである。また、通学距離は、小学校が約4km以内、中学校が約6km以内であることが法律によって定められている。

具体的な対象校は、山間部では、1中学校区(2小学校+1中学校)、都市部では、3中学校区(1小学校+1中学校、2小学校+1中学校、3小学校+1中学校)を調査し、提案した。また、都市部では、市の決めた学校区を無視した場合も考えた。

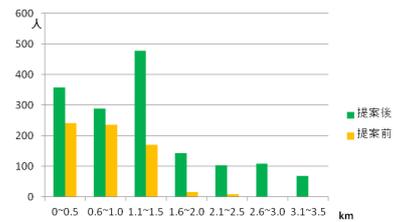
4.2 都市部を例として

ここでは、都市部に存在する久居中学校区を例とする。久居中学校区は、成美小学校、誠之小学校、戸木小学校、久居中学校の3小学校+1中学校で構成されている。また、それぞれの普通教室数は、23、18、12、24であり、前期、中期、後期それぞれの学級数は、20、14、10である。

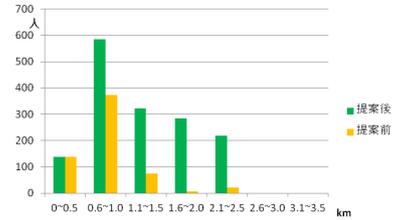
学級数と教室数の組み合わせから7パターン考えられ、前期-誠之小 中期-成美小 後期-久居中 という組み合わせが良いと考えた。この時、現在の普通教室数と学級数の数だけの組み合わせで考えると、

前期-成美小 中期-誠之小 後期-久居中 という組み合わせが良いと考えたが、前期の生徒達が3km以上の通学距離になってしまうのは、負担が大きくなるため、前期を誠之小学校とした。その場合、誠之小学校の教室を一時的に2つ増やすと考えた。また、将来的に少子化によって教室数が余ると予測し、前期-誠之小 中期-成美小 後期-久居中という組み合わせが可能であるとした。

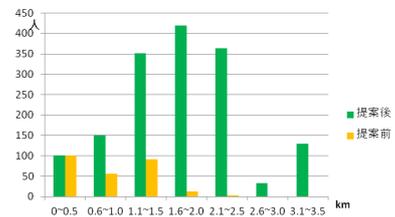
しかし、前期と中期の生徒の通学距離は、法律で定められている通学距離は、クリアしているものの現在よりも必然的に長くなる。図4では、図1のメッシュデータをもとに、4-3-2 制の提案前と提案後それぞれの距離分布を示したものである。特に、現在、戸木小学校に住む生徒達の負



(a) 成美小学校



(b) 誠之小学校



(c) 戸木小学校

図3: それぞれの小学校までの距離分布

担が大きくなる事が分かる。

また、久居中学校区と久居東中学校区の2中学校区で市の決めた学校区を無視した場合も考えた時、様々なパターンが考えられ、戸木小学校区に住んでいる生徒の負担が減る事が分かった。隣の学校区も含めて議論した方が、もっと良い結果になる場合もあるため、様々なグルーピングで考えるべきである事も分かった。

4.3 おわりに

4-3-2 制での小中一貫教育を行う事は、可能であるが、前期・中期の子供たちの通学距離が長くなる事は避けられない。地域の特徴は様々であるため、市の決めた中学校区を基準に行うだけでなく、隣の学校区も共に考慮し、個々で提案するべきである。また、少子化を踏まえた数年後の人口推移を予測する事によって、教室数や組み合わせも変わるかもしれない。

参考文献

- [1] 津市ホームページ
<http://www.info.city.tsu.mie.jp/>
- [2] 文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/051/index.htm